



## 私の思い出写真館

# 夏のパリの思い出



**野木森 雅郁**  
アステラス製薬  
取締役会長

この写真、皆さんにとっては単なる数字、自己満足との誇りそしはあるでしょうが、私にとっては意味のある数字、経済同友会事務局から「経済同友」への寄稿を頼まれ、困った揚げ句に選んだのがこの写真です。

時は1998年8月13日、ミュンヘン駐在時に妻と祝日『マリア昇天の日』を利用してパリへ小旅行に出掛け、市内のあちこちを観光し、エッフェル塔で偶然目にした光景です。この“506”、ミレニアム・ブームのさなか2000年までの残日数がエッフェル塔に表示され、それがあと506日だったというわけです。

快晴、汗ばむ暑さの昼下がり、エッフェル塔のたもとに着いた時、この506という数字が真っ先に目に飛び込んで来て思わずカメラのシャッターを押したことを鮮明に覚えています。

なぜ506という数字にこだわるのか、早くも皆さんから急かされているようですので、理由を明かします。その当時のミュンヘンでの私の仕事の対象、アステラス製薬(旧藤沢薬品)が欧州で市場浸透を図っていた免疫抑制剤の開発



1998年8月13日 パリ エッフェル塔前にて

コード番号(製薬会社では開発段階の薬は自社のコード番号を使うのが習わしです)が506だったのです。その時のアステラス製薬(旧藤沢薬品)の欧州子会社はまさにこの製品のワン・プロダクト・カンパニーで、この製品の成否に将来が懸かっていました。国によって発売の時期は異なりますが、発売して数年、早く黒字化に持っていきたいという時でした。従って、旅行に出ても、私の頭の中はいつもこの製品のことが頭にこびりついて離れず、エッフェル塔で見つけた506の数字を写真に収めることで仕事の励みにしようという意識と、この偶然が何か後押しを

してくれているようなささやかな高揚感がありました。幸いこの製品、その後の順調な成長により移植治療の標準薬となり、今も世界中の移植患者さんのお役に立っております。

